

Biomed retractions have quadrupled in 20 years – why?

—バイオメディカル分野の論文撤回がここ 20 年で 4 倍に—

Nature, News, Vol. 630, pp.280-281, June 13, 2024.

増え続ける論文撤回

欧州のバイオメディカル分野では、2000年から2021年の間に論文の撤回率が4倍になっているそうである。そのうち3分の2は画像の加工や不正な著者といった研究不正が占めていた。撤回された数としては実に1,000を超える。

変化する撤回理由

2000年時点での撤回の主原因は倫理や法的な問題（おそらく被験者関連）や著者の問題、画像の複製であったが、2020年においては画像の複製は依然として主原因の1つであるが、データの信頼性が主原因として浮上してきた。データの信頼性とは、元データが提供されていなかったり、データに強いバイアスや欠損があるといった内容である。恐らくは欲しい結論を得るためにデータをいじくったり、でっち上げる類のものである。その主因は過去のコラムでもまとめた論文複製(Paper Mills)¹であるとされている。Retraction Watchの共同創設者によれば、盗作検知システムの進化が撤回数の増加に関係していると分析している。

博士課程の倫理教育

こうした研究不正の増加は、質よりも数を重視する官僚主義化した研究環境にあるということは何度か指摘してきた。この流れはどうにかしてほしいところはあるが、研究者の道を歩むなら研究倫理を学ぶべきであろう。博士時代を振り返るとこうした倫理教育は一切なかった。一方、社会人になってから建コンでは技術士倫理を試験等とおして学んできたし、トーマツに入ってからプロフェッショナルファームとして徹底した倫理教育をまず受けてきた。デロイトのeラーニングは本当によくできている。博士も一種の士業として倫理教育の体系化と教育の徹底が必要なはずである。

EBPM

最近、政府レベルでEvidence-Based Policy Makingが流行りつつある。要は研究成果といったエビデンスに基づいて政策を決めようというものであるが、そのベースとなる論文が不正に塗れている現代においてはその実効性も怪しい。現実的な方法として、各分野の学識者がテーマに応じて研究成果をまとめるというものがあるが、目利き力は勿論、学識者も他士業と同様に高い倫理感と利害関係を断ち切った独立性が求められることとなろう。実際のところ、今の査読環境であればほしい結論ありきで研究をでっち上げられるし、欲しい結論ありきで調査結果をまとめることができってしまう。AIがこれを代替するのは大分先な気がする。

参考文献

1. [蔓延する論文複製との戦い](#)

注意

1. 本稿の内容はすべて筆者の個人的見解に基づくものであって、筆者の所属組織とは無関係です。